

令和七年度前期日程入学試験学力検査問題

国語

文学部・教育学部・法学部・経済学部(文系)

令和七年二月二十五日 十三時三十分～十六時(一五〇分)

注意事項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子、解答用紙を開いてはいけない。
- 二、この問題冊子は、二十三ページである。問題冊子の白紙のページや問題の余白は草案のために使用してよい。なお、ページの脱落、印刷不鮮明の箇所などがあった場合には申し出ること。
- 三、解答は、必ず黒鉛筆(シャープペンシルも可)で記入し、ボールペン・万年筆などを使用してはいけない。
- 四、解答用紙の受験記号番号欄(一枚につき二か所)には、忘れずに受験票と同じ受験記号番号をはっきりと判読できるように記入すること。
- 五、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入すること。各問とも解答の指定字数には句読点・括弧等を含む。
- 六、解答用紙を持ち帰ってはいけない。
- 七、試験終了後、この問題冊子は持ち帰ること。

——このページは白紙——

——このページは白紙——

— 次の文章を読んで問いに答えよ。

著作権の都合上、

この部分はご覧いただけません。

著作権の都合上、

この部分はご覧いただけません。

著作権の都合上、

この部分はご覧いただけません。

著作権の都合上、

この部分をご覧いただけません。

著作権の都合上、
この部分はご覧いただけません。

(松井哲也「AIの手を掴むくらいなら溺れて死ぬ」による)

(注) ○インタラクシヨン——相互作用。 ○ボトルネック問題——難点が一所に集中している型の問題。

○ディープラーニング——音声認識や画像認識など、コンピュータに人間と同等の情報処理機能を学習させる機械学習の一種。

○シンギュラリティ論——ある時点でAIが人間の能力を超える段階に至るという論。

○インタフェースデザイン——ユーザにとっての機器の使いやすさを向上させるデザイン。

問(一) 傍線の箇所(1)(2)(3)(4)(5)の片仮名を適切な漢字に書き改めよ。

問(二) 傍線の箇所(ア)に「なぜAI(人工知能)は人間よりも上手く問題が解けるのだろうか」とあるが、筆者はその理由についてどのように述べているか。本文の内容に即して四十字以内で説明せよ。

問(三) 傍線の箇所(イ)「このような問題」とは、どのような問題か。本文の内容に即して四十五字以内で説明せよ。

問(四) 傍線の箇所(ウ)に「このような官僚組織によって行われる意思決定が(私)の人生に影響を及ぼすことと、人工知能というブラックボックスの意思決定が(私)の人生に影響を及ぼすこととの間には、どのような差異があるだろうか?」とあるが、その「差異」とはどのようなことか。本文の内容に即して六十字以内で説明せよ。

問(五) 傍線の箇所(エ)に「人工知能は説明不可能な存在であるからこそ、私たちの日常の論理を相対化してくれるのだ」とあるが、筆者がそのように考える理由を、本文全体の内容を踏まえて七十五字以内で説明せよ。

二 次の文章を読んで問いに答えよ。

著作権の都合上、

この部分はご覧いただけません。

著作権の都合上、

この部分をご覧いただけません。

著作権の都合上、

この部分はご覧いただけません。

著作権の都合上、

この部分をご覧いただけません。

著作権の都合上、

この部分はご覧いただけません。

著作権の都合上、

この部分はご覧いただけません。

著作権の都合上、

この部分はご覧いただけません。

(木内昇「剛心」による)

(注) ○妻木——妻木頼黄(二八五九—一九一六)、明治時代の代表的な建築家。

○武田——武田五一(一八七二—一九三八)、建築家・建築学者。妻木の指導の下、建築に従事する。

○鎗田——鎗田作造。妻木の下僚に当たる職人出身の技師。

問(一) 傍線の箇所(1)(2)(3)の語句の意味を文脈に即して簡潔に記せ。

問(二) 傍線の箇所(ア)に「鎗田が憤然と吐き捨てる」とあるが、ここには鎗田の何に対するどのような心情が表れているか。本文の内容に即して四十字以内で説明せよ。

問(三) 傍線の箇所(イ)に「自分の役目に救われているのだ」とあるが、「自分の役目に救われている」とはどのようなことか。本文の内容に即して六十文字以内で説明せよ。

問(四) 傍線の箇所(ウ)に「みんなお伽噺のようだって」とあるが、「みんなお伽噺のようだ」とはどのような意味か。本文の内容に即して四十文字以内で説明せよ。

問(五) 傍線の箇所(エ)に「え？」と喉元まで出掛かった声を、すんでのところでミナは呑み込んだ」とあるが、ここで「え？」という声が出掛かったのはなぜか。本文全体の内容を踏まえて九十文字以内で説明せよ。

三 幼い頃に母を亡くした大君と中の君は、最近父八の官が死去したことで悲しみに沈んでいる。以前から中の君と文のやり取りがあった兵部卿官(句官)は、京から姉妹が住む宇治の山荘に度々弔問の使者を遣わす。文章を読んで問いに答えよ。

兵部卿官よりも、たびたびとぶらひきこえたまふ。さやうの御返りなど、聞こえん心地もしたまはず。おほつかなければ、中納言にはかうもあらざるを、我をばなほ思ひ放ちたまへるなめりと恨めしく思す。紅葉の盛りに、文など作らせたまはむとて、出で立ちたまひしを、かくこのわたりの御追遠、便なきころなれば、思しとまりて口惜しくなん。

御忌もはてぬ。限りあれば涙も隙もやと思しやりて、いと多く書きつづけたまへり。時雨がちなる夕つ方、

「牡鹿鳴く秋の山里いかならむ小萩がつゆのかかる夕暮

ただ今の空のけしきを、思し知らぬ顔ならむも、あまり心づきなくこそあるべけれ。枯れゆく野辺もわきてながめらるるころになむ」などあり。「げに、いとあまり思ひ知らぬやうにて、たびたびになりぬるを、なほ聞こえたまへ」など、中の官を、例の、そそのかして、書かせたてまつりたまふ。今日までながらへて、硯など近く引き寄せて見るべき物とやは思ひし、心憂くも過ぎにける日数かな、と思すに、またかき曇り、もの見えぬ心地したまへば、押しやりて、「なほえこそ書きはべるまじけれ。やうやうかう起きあられなどしはべるが、げに限りありけるにこそとおほゆるも、疎ましく心憂くて」と、らうたげなるさまに泣きしをれておはするもいと心苦し。

夕暮のほどより来ける御使育すこし過ぎてぞ来たる。「いかでか、帰りまゐらん。今宵は旅寝して」と言はせたまへど、「たち返りこそ参りなめ」と急げば、いとほしうて、我さかしう思ひしづめたまふにはあらねど、見わづらひたまひて、

(1) 涙のみ霧りふたがれる山里はまがきにしかぞもろ声になく

黒き紙に、夜の墨つきもたどしければ、ひきつくるふところもなく、筆にまかせて、押し包みて出だしたまひつ。

御使は、木幡の山のほども、雨もよにいと恐ろしげなれど、さやうのものを怖ぢすまじきをやり出でたまひけむ、むつかしげなる笹の隈を、駒ひきとどむるほどなくうち早めて、片時に参り着きぬ。御前にても、いたく濡れて参りたれば、禄賜ふ。さ

きざき御覽ぜしにはあらぬ手の、いますこしおとなびまさりて、よしづきたる書きざまなどを、いづれかいづれならむとうちも置かず御覽じつつ、とみにも大殿おほとのこま籠らねば、「待つとて起きおはしまし、また御覽するほどの久しきは、いかばかり御心にしむことならん」と、御前(9)なる人々ささめききこえて、憎みきこゆ。ねぶたければなめり。

まだ朝霧深きあしたに、急ぎ起きて奉りたまふ。

「朝霧に友まどはせる鹿の音をおほかたにやはあはれとも聞く

もろ声は劣るまじうこそ」とあれど、あまり情なさけだたんもうるさし、一ところの御蔭かげに隠ろへたるを頼みどころにてこそ、何ことも心やすく過ぐしつれ、心より外ほかにながらへて、思はずなることの紛れつゆにてもあらば、うしろめたげにのみ思しおくめりし亡き御魂たまにさへ瑕きずやつけたてまつらん、となべていとおつつましう恐ろしうて聞こえたまはず。

(『源氏物語』による)

(注) ○中納言——薫。勾官と同様に姉妹との交流があった。 ○御忌——八の官没後四十九日の忌の期間。

○中の宮——中の君。 ○まがき——竹や柴などを編んで作った垣根。 ○木幡の山——宇治と京の間にある山地。

問(一) 傍線の箇所(1)(2)を文脈に即して口語訳せよ。

問(二) 傍線の箇所(ア)げに、いとあまり思ひ知らぬやうにて、たびたびになりぬるを、なほ聞こえたまへ」を、文意が通じるように適宜言葉を補って口語訳せよ。

問(三) 傍線の箇所(イ)の「涙のみ霧りふたがれる山里はまがきにしかぞもろ声になく」という歌は、誰が詠んだ、どのような趣旨の歌か。本文の内容に即して四十五字以内で説明せよ。

問(四) 傍線の箇所(ウ)に「御前なる人々ささめききこえて、憎みきこゆ」とあるが、「御前なる人々」は、誰のどのような様子に対してこのように反応しているのか。本文の内容に即して四十五字以内で説明せよ。

問(五) 傍線の箇所(エ)に「聞こえたまはず」とあるが、なぜか。本文の内容に即して六十五字以内で説明せよ。

——このページは白紙——

四

次の文章を読んで問いに答えよ。なお、設問の都合上、一部訓点を省いたところがある。

閭門外上津橋朱某家貧、欲入山尋死、遇仙解救授測字一書、其驗如神。求之者必需預定日期、每日只測一字、取資一兩。懸牌門首、某日測某人字。時吳三桂將反、有文書來向蘇藩庫借餉十萬兩。方伯慕公天顏躊躇莫決、乃延朱測字、且告以故。朱曰、「請命一字」。適凡上有殘柬、慕公隨手翻轉、指正字為枚。朱曰、「不可借」。正似王字、王心已乱。且柬正面合凡上正而反矣、即反之兆也。慕即拒之。未幾、果応其言。其子亦習父業、占驗不減于父、但非一日測一字也。有下人以武字問、有子否。朱曰、「絶矣」。一代無人、自⁽¹⁾此而止。其人果無後。

朱子^シ死^シ、其書^シ徧^シ尋^シ不得^シ。或^ヒ以^テ為^ス仙人^シ収^メ去^レ。遂^ニ失^ス其^ノ伝^ヲ。

(錢泳「履園叢話」による)

(注) ○閶門——江蘇省蘇州の城門。 ○測字——依頼者が示した漢字の全体や部分を見て行う占い。

○取資——料金をとること。 ○吳三桂——明末清初の武將。清朝に降伏した。

○蘇藩庫——江蘇省の財政を司る江蘇布政使司の倉庫。 ○餉——軍資金。

○方伯——布政使司の長官である布政使の別称。 ○慕公天顏——江蘇布政使であつた慕天顏のこと。

○几上——机の上。 ○殘東——手紙や書類などの反故紙、切れはしの類。

○枚——占うこと、またそのための材料。

問(一) 傍線の箇所(1)「將反」、(2)「無後」の意味を記せ。

問(二) 傍線の箇所(ア)「正似王字」、(イ)「未幾、果応其言」をすべて平仮名で書き下せ。現代仮名づかいでよい。

問(三) 傍線の箇所(ウ)「占驗不減于父、但非一日測一字也」を口語訳せよ。

問(四) 傍線の箇所(ア)「慕即拒之」とは、どのようなことか。本文の内容に即して三十字以内で説明せよ。

問(五) 傍線の箇所(ハ)「絶矣」とあるが、朱はなぜそのように告げたのか。本文の内容に即して七十字以内で説明せよ。

